

# 宋・元版本にみる法華経絵（下）

宮 次 男

## 四

『国立故宮博物院善本書目』によると、元代に製作されたという法華経は次の九種が所蔵されている。

- (1) 妙法蓮華経七卷一冊 元延祐乙卯（二年）中峰和尚写本
- (2) 妙法蓮華経七卷七冊 元至順間刊蘇体本
- (3) 妙法蓮華経七卷七冊 元刊蘇体本（194—200）
- (4) 妙法蓮華経七卷七冊 元刊蘇体本（201—207）
- (5) 妙法蓮華経七卷七冊 元刊蘇体本（187—193）
- (6) 妙法蓮華経七卷七冊 元刊蘇体本（166—172）
- (7) 妙法蓮華経七卷七冊 元刊蘇体本（180—186）
- (8) 妙法蓮華経七卷七冊 元重刊嘉興路本
- (9) 妙法蓮華経七卷七冊 元积元浩写本

このうち、(3)―(7)は目録の記載だけでは、どの作品がこれに当るのか不明なので、蔵書番号を記入した。

(1)と(9)の写本のうち、(1)中峰和尚写本は紺紙金字の細字本で、これに

宋・元版本にみる法華経絵（下）

は見返絵はない。

(9)元浩写本は紺紙金字経で見返絵も同様の金泥絵である。各巻末に銀字の跋があり、それには「至順改元歲次庚午上元日」すなわち一三三〇年の年紀があり、絵も細密画でみるべきものである。なお、これについては別の機会に紹介するつもりなので、今回は敢えてふれないことにする。

版本としては七種をかぞえるが、元刊蘇体本の(3)（194—200）は見返絵を欠く。したがって、これを除き、六種の作品についてのべる。

まず、製作年代の判明する(2)元至順間刊蘇体本は、巻末に二種の印刷供養銘がある。しかし、損傷あるいは欠脱した所もあって、その全体を把握することは困難であるが、一応の筋を通すと、浙西道嘉興路県の三寶弟子姚陳、道榮らが至順二年（二三三二）七月に法華経七卷七冊をそれぞれ分担して刊造し、その版で再び、姚陳、道榮が至正六年（一三四六）四月に印行したことがわかる。したがって、現在の版経は至正六年再版のものである。

この至順刊本は全体に汚損甚だしく、見返絵は巻頭二折、四頁にわた

って描かれるが、卷二、卷三は第一頁を欠き、卷四も第一頁の大半が破損している。しかし、説話内容を描いた第二折、三、四頁はほぼ残っている。

前記したように、故宮博物院の元刊法華経で現在見返絵をもつものは、この至順刊本のほか、(4)―(8)の五本を数える。しかし、(6) (166―172)の一本を除いて、他はいずれも至順刊本と全く同図である。但し、その板匡の高さと巾はいずれも小異がある<sup>(9)</sup>。したがって、これらはすべて同版とはいえない。また、(4) (201―207)の巻五の右下端に「施仁刊」、(7) (180―186)の巻二右下端に「吳琮施刊」、巻五右下端に「施仁刊」と銘札があり、他と区別される。しかし、全く同じ構図と表現で彫成されてお

り、同一系統の版本であることは間違いない。そこで、これらの諸本については一括して述べることにする(図版V挿図19―25参照)。

見返しの図は二折、四頁にわたるが、周囲には宋版にみた額縁状の装飾はなく、また内題もない。釈迦説法は露台で行われずに雲上で行っているように表現され、登場の聖衆も少くなっている。しかし、説相の主題は宋版と全く同じといつてよい。また、基本的には構図においても、火宅(巻二)、化城(巻三)、転輪聖王の居館(巻五)など、大きな建物の配置、景観も似ている。しかし、部分的にはかなりの相違があり、また表現において、全く異っているのはいうまでもない。

先ず第一に、これら元版には各図の左下端に、香炉ないし経冊をもつ

挿図19 法華経巻一見返絵 台北 国立故宫博物院蔵

挿図20 同 卷二見返絵 同 上

挿図21 同 卷三見返絵 同 上

挿図22 同 卷四見返絵 同 上

挿図23 法華経卷五見返絵 台北 国立故宫博物院蔵

た俗人供養者の姿が表わされている。それも版により二つに大別され、至順刊本と図版と挿図に示した(5)(187-193)の蘇体本の供養者は卷六が合掌の一人で、他は二人ないし四人であるが、他本は主に持香炉の男一人となっている。

次に、宋版と比較して、元版の説相図中に見る画題上の主な相違点をあげよう。

卷一では、仏画制作の作業を見て、童子二人がそれぞれ地面に仏画を描く光景が加えられ、さらに釈迦眉間の放光が上下でなく左右に分かれて、その中の図相も、遠山、比丘形菩薩を礼拝する者、仏殿、仏塔を礼拝する男などが加えられている。

挿図24 同 卷六見返絵 同 上

っており、宋版の露台入口で読経する女性が、元版では男性の姿となり、その位置も異っている。

卷五では、雲上の菩薩が十人から五人に減少する。このほかは構図的にもあまり変更はない。

卷六では、蓮華上の女性が男性になっていて、宋版にみられる傍の竜ではなくなっている。また舍利供養の塔も四基から二基に減少しており、その位置も焼身供養の場所と入れ変っている。

挿図25 同 卷七見返絵 同 上

卷二では、三本の大樹がなくなっており、三車のうち、鹿車のほかに羊車にも御者が侍立する。

卷三では、四大声聞授記の場面が二人の俗形に減じている。また、宋版では、化城のそばに見られた雲上の如来の姿が元版ではなくなっている。さらに、構図的に、葉草諭の雲竜の下にあった樹木や箆笠の男は雲下でなく、この雨雲と全く関係のない画面中央に移っている。その代り、この雲竜は化城にそって歩く二虎と対峙するように接近して示されている。

卷四では、宝塔の形が元版では多層にな

れている。また、食中毒の場面が野外になり、杵槓枷鎖難が刀尋段々壞の光景に代っている。そのほか、雷雨下の男のもつ笠が唐傘に代っているのが気付かれる。

以上は、元版の見返絵にみる図相の特異点であるが、このような差異があっても、法華経絵としては、図相上、宋版の伝統を受けて制作されたことは否定できない。(表参照)

次に画面構成の面からみると、宋版では雲気や土坡の線が全面に入つて、繁雑な画面になっているが、元版ではそうした繁雑さはなく、樹木や岩石などの自然景を随所に入れて絵画的効果をあげ、また、卷三の葉草諭図にみたように、雲竜と虎を対決させて、葉草諭の表現としては不適當な構図も敢て行っている。そのために画面としてのまとまりがよく、鑑賞画としての性格が多分に窺われるのである。さらに彫板の手法も、唐咸通九年(八六八)の金剛般若経見返絵以来の版経見返絵にみる伝統的な仏版でなく、極めて精緻な彫成が示されていて、樹木や岩石などは鑑賞画として通用するものである。また、仏、菩薩や人物の表情も克明に表わし、風俗画としての表現がみられる程である。

このように、ここにみた元版は宋版に比べて、表現上、構図においても、また彫成においても飛躍的な相違がある。しかし、ここに例としてあげた元版はむしろ特製本で、一般にはまだ伝統的な仏版が刊行されていたとみるべきであろう。その遺例が先に除外した(6)(166—172)の一本である。

この一本は『善本書目』では元刊蘇体本と記されているが、本経につけられた故宮博物院の審定は宋刊蘇写本版となっており、いずれをとる

べきか迷うところである。

見返絵は卷頭二折、四頁にあり、その周囲は三鈷繋ぎの文様帯で飾られている。<sup>(10)</sup>そしてその区画内右上端に「法華経第一卷連相」と内題がある。但し、卷二、四はこれと同じで、卷三、七は「妙法蓮華経連相卷第三(七)」となり、卷五は内題なく、卷六は「法華経第六卷相」とあって、かなりまちまちである。

全体的に図相は宋刊大字本や栗棘庵本に似る構図配置であるが、彫板が両者に比べて重厚である。また、各図の左下隅に供養比丘が二人示されるのは異なる点といえる。

次に宋版との主な相違点をあげよう。

卷一は、釈迦の放光は同じく二段であるが、上段光中は右から舍利塔礼拝の男、如来礼拝の男、涅槃礼拝の二僧、空中の四宮殿、下段光中は右から遠山、樹間の比丘菩薩礼拝の二男、阿修羅に追われる犬と餓鬼、走る犬、牛頭獄卒の見る釜に蓮花が生ずる所となっている。これは前記元版の同図と内容的に一致する所が多いことは注目されよう。

卷二は、露台の脇にある二大樹がなく、露台上の坐像が五人となつて、一人増加している。

卷三は別に変化なく、卷四では、二仏並坐の宝塔がここでは十三重塔になっている。

卷五、卷六も図像的に変化ない。

卷七は、妙音菩薩の礼拝する塔が十三重塔になっており、また、雷雨下の人が唐傘をさしている点が異なる。

以上、本経見返絵に見る図相は、宋刊大字本と前記元刊本の中間に位



置するといえよう。特に宝塔が十三重塔と多層になっていることが注意を引く。また、その彫板の技術も、いわゆる仏板に共通するものである。したがって、その製作年代の判定に異論が生じるのも、あり得ることで、私自身も未だ結論を出していない。

注(8) 各巻末に左記の印刷供養銘がある。

嘉興路城南米市街西面南居奉

三宝弟子姚陳道榮同女姚陳妙真親男宗茂与家眷

等特發誠心袖施己財榮上年印施外人命二再行印施

大乘妙法蓮華經典上卷四恩下資三有保扶道榮身安

寿永眼日光明家眷平安子孫昌盛者

至正丙戌歲四月吉日姚陳 道榮謹題

また、これとは別の供養銘があり、それは各巻異っているようであるが、判読のできる巻四の巻末供養銘をあげる。

浙西道嘉興路海塩州激浦鎮居住奉

仏信士楊元坦同妻韓氏男親音奴女佑女奴施財命工刊造

大乘妙法蓮華經内第四卷所哀功德上資祖爾仗

仏慈恩超登榮土次異保佑家居平善

長幼安康仕路亨通嗣息繁衍者

至順貳年 月 日 謹題

注(9) 板匡の高さと巾の寸法を左に列挙する。(2)~(8)の数字は本文にのべた経巻の番号。寸

法の単位は糎。

(8)	31.5	30.3	31.4	31.7	31.2	62.2	61.6	61.0	61.0	61.8	61.5
(7)	31.0	31.6	31.0	31.5	30.4	62.0	62.0	62.0	62.0	61.8	62.7
(5)	31.5	30.9	31.1	31.4	31.1	62.8	62.7	62.9	61.3	62.4	62.7
(4)	31.3	31.3	31.7	31.9	31.2	62.0	62.2	61.8	61.4	61.4	61.6
(2)	31.3	31.2	30.8	31.1	30.8	62.5	( )	( )	( )	62.8	62.5

高一二三四五六七  
卷卷卷卷卷卷卷  
巾一二三四五六七  
卷卷卷卷卷卷卷

宋・元版本にみる法華経絵(下)

(10) 各巻の寸法(単位糎)は左の通り

高	52.4	55.0	58.8	60.0	59.0
巾	31.1	31.3	31.8	31.8	31.7

一一三四五六七  
卷卷卷卷卷卷卷

## 五

宋及び元時代に印行された法華経見返絵について、図相を中心に考察してきた。次に、これらが後世の法華経絵にどのような影響を与えたであろうか、考えてみたい。

まず、中国のその後の遺品であるが、故宮博物院には、この種の図相の伝統を継承した作品は所蔵されていない。しかし、前記した反町家蔵紺紙金字法華経巻三及び巻五見返絵は、宋刊大字本や栗棘庵本と同主題で構図も一致したものであり、これが十二世紀末の制作であることは、同時代に写本と版本が同一図相で流布したことを示唆するといえよう。

版本と写本の見返絵が同一図相の例は、前記した元至順間刊蘇体本系と同一図相をもつ徳川美術館蔵紺紙金字法華経七冊にも窺うことができ(挿図26)この法華経については、山本泰一氏「見返し絵のある中国の紺紙金字法華経―徳川美術館蔵―」(『金甌叢書』第八輯 昭和五六年六月)に詳細に紹介されており、私もそれによってこの存在を知った。そして、山本氏の御好意により、その図相と元版本図相の比較を試みる事ができたのである。

次に両者を比較すると、基本的構図、その様式的特色等は同一系統の

作品であることは疑いない

が、細部に若干の相違がある。それは、全巻を通じて釈迦の台座が、版本では円形であったのに写本では方形になっている。また、版本の台座蓮弁が大きく示されていたのに、写本では通常の座台にみる大きさになっている。そして、版本の各図相左下端に示された供養者の姿は、写本にはみられない。以上は七巻の全体の図相に共通する相違である。次に各巻で写本にみる相違点をあげる。

巻一では、釈迦の前にあった獅子が宝珠になり、画面のほぼ中央にあった二本の松樹のうち、高く目立つ一本が無くなっている。

巻二は、火宅の室内にあった机と円形の椅子がなく、堀内にいた二童子が堀の外に出ている。

巻三は変化なく、巻四は釈迦の向って左側に立つ力士は右手を背後にまわして金剛杵を描いていない。

巻五は、寿量品の良医調薬の場面に机がなく、この図相では良医妙薬

挿図26 金字法華経巻四見返絵 徳川黎明会蔵

の譬喩に適當でない。

巻六は、展転説法の僧、俗二人の床座背障に山水の絵がなく、一切衆生意見菩薩が供養する右側の舍利塔の下框が一重になっている。これでは上框が二重であるから不適當である。

巻七は、仏塔礼拝する妙音菩薩から頭光がなくなっているが、象の脇に立つ普賢菩薩に頭光が加えられている。

以上が元版本と徳川本の図相上の相違点であるが、巻五の調薬場面の相違は極めて重要である。他場面の相違については、特に問題はないが、この巻五の相違は、宋代版本の図相の伝統を全く無視するもので、これは巻六の舍利塔の框の相違と共に、元版本に定着した宋代以来の伝統図様から一歩後退した写しくずれと理解せざるを得ない誤りである。

このように徳川本の性格を考えると、徳川本は版本から転写したことが推測されるが、しかし、これは早急に結論できない。また、その制作年代については、山本氏は前記論文の中で、京都国立博物館蔵、至元二年（二二九一）奥書の紺紙金銀字大方広仏華嚴経との比較から、本経もほぼその頃の作と推定しておられる。私自身、この山本説を批判するに足る知見を持ち合わせていないが、ただ、徳川本にみる写しくずれの問題がどうしても気になる。それはともかく、宋代につづいて、元代の図相もまた写本として描かれていたことを知ることができたのである。

## 六

朝鮮における法華経見返絵は、主に紺紙金字或は銀字の高麗写経に見

ることができる。

高麗経見返絵では、奈良談山神社蔵細字法華経一卷と陸奥国分寺蔵紺紙金字法華経巻六が古作であるが、これらは宋版法華経の見返絵とは図相の伝統を異にするので、ここでは敢てふれないことにする。

宋、元版法華経見返絵の系譜をひくと考える遺品を見ると、いずれも七巻七冊の折本で、その多くは奥書により書写年代を知ることができ、『高麗仏画』（朝日新聞社 一九八一年刊）により、主要遺品を次にあげる。

- (1) 京都宝積寺蔵 四冊（七巻）至元三十一年（一二九四）書写
- (2) 金沢大乘寺蔵一冊（巻一）、松江天倫寺蔵五冊（巻三―七）、延祐二年（一二三二）書写
- (3) 福井羽賀寺蔵七冊（七巻）泰定二年（一二三五）書写
- (4) 佐賀鍋島報効会蔵六冊（巻四欠）至正六年（一三四〇）書写
- (5) 東京根津美術館蔵七冊（七巻）至正十三年（一三五三）書写
- (6) 東北大学蔵一冊（巻四）

いずれも見返絵は折本二折四頁にあり、三鈷を周囲の額縁状の文様帯に配した区画内の右端に、「妙法華経巻第一変相」（宝積寺本、羽賀寺本、鍋島本）或いは「妙法蓮華経第一巻変相」（大乘寺・天倫寺本、根津本、東北大本）と題し、釈迦説法図と経意を描いている。そして、釈迦説法図は宝積寺本を除き、宋版見返絵同様、露台上で聖衆に囲まれた釈迦説法図で、左二百分に経意が図示される構成である。

その図相をみると、宝積寺本は巻一の一図しかなく、しかも、天蓋下の釈迦が宝机を前にして聖衆に囲繞されて二菩薩形に対座する姿で示さ

宋・元版本にみる法華経絵（下）

れているのみで、経意は図示されていない。

大乘寺・天倫寺本は巻一、七が宋版と図相を異にするが、巻三、四、五、六は構図配置なども宋版と殆ど同じである。

巻一では釈迦の放光は宋版同様上下二段であるが、上段に舍利塔札拜の比丘が加えられている。また、仏殿前の奏樂供養がなく、路上の三尊仏を札拜する僧俗が示され、さらに、フイゴを使用して、金銅仏が制作され、三体の作品中に、誕生仏もみられる。仏画制作は宋版では画絹を立てかけて描くが、これは地面に置いて描いており、元版にみた童子が地面に仏像を描く姿も示されている。（挿図27）

る。（挿図27）

巻三は、雨具をつけた男が向う家屋がここでは描かれていないほか、配置に小異はあるが図相としては殆んど変りはない。また、巻四、五、六は構図、配置においても、宋版と大差がない。

巻七は、雨下の人物が唐傘で雨をよけており、宋版では上方にあった山頂落下の場面が左下端に小さく描かれ、そこには海上の船が示されている。また宋版にみた火坑が水池に変化する場面と、屋内で食中毒に苦しむ場面は無い。さ

挿図27 高麗金字法華経巻一見返絵 石川 大乘寺蔵

らに、妙音菩薩の飛来が示されてはいるが、観音品所説の場面向っているので、この菩薩は観音菩薩として示されていると見なければならぬ。したがって、卷七は、かなり宋版と異なる表現の図相を呈するといえるのである。

羽賀寺本七冊は、各巻とも宋版と図相が異なるが、特に卷四、五の両巻は、釈迦説法図の位置するところに雲上宝塔内の釈迦、多宝二仏並坐像が示されている。(挿図28) 現在の妙法蓮華經の構成では、多宝如来の仏塔が出現するのは卷四の見宝塔品第十一で、その帰還は卷六の囑累品第十二に説かれているが、その後の普門品第二十五にいたるまで多宝如来ないし多宝仏塔についての記述があり、その点は妙法華經の成立論にかかわる大問題であるが、ともかく、多宝塔内二仏並坐像は法華經圖像として、密教の法華曼荼羅を引用するまでもなく、重要な主題である。

さて、羽賀寺本第一変相は釈迦の放光は上下二段であるが、上段は仏涅槃を礼拝する像俗のみが示され、下段に舍利塔礼拝、山間歩行の行者(?)、走る餓鬼、阿修羅、牛、鉄釜と獄卒二人が、描かれる。餓鬼以下

挿図28 高麗金字法華經卷五見返絵 福井 羽賀寺蔵

は宋版と同主題である。その下方の場面は、菩薩の罪人救済、如来を礼拝する四俗、木仏制作、フイゴを用いた金仏制作で、その作品は如来坐像と誕生仏の二体、さらに地面に画絹を置いての仏画制作と、小児が地面に棒切れで仏画を描くところ、そして小児の聚沙造塔が示される。したがって、仏前奏樂供養は描かれていない。

第二変相は、火宅三車の譬喩場面の下に二狐を棒切れで追う二児と、窮子に財宝を与えている長者を描く。宋、元版にみた窮子の小屋や悶絶する窮子の姿は描かれていない。

第三変相は、三俗に説法する仏三尊像、同一の雲に乗って飛来する三如来、化城の上方に雲上二宝殿、化城の前を歩行する二虎、王の施膳、雲竜の口から雨が吹き出され、その下に牛を引いて帰る雨具姿の二農夫が示される。なお、本図では宋、元版に見た十六王子の説法は描かれていない。

第四変相は画面右半分に雲上の宝塔内二仏並坐が描かれ、その左前方に飛来する三菩薩と三僧がそれぞれ同一の雲上に描かれる。そして、ほぼ画面の中央やゝ左手に雲上に涌出した三重塔があり、初層に二仏、第二、三層にそれぞれ一仏が坐像で示されている。その上方には海中から蓮台に乗って出現した文殊菩薩とそれを岸から礼拝する二俗形があり、画面左上端に屋敷で睡眠する男と宝珠を持つ男、すなわち衣裏繫珠の譬喩が示される。その下には太鼓を打つ男と長者を描いて求法のため良師を求める王の話を示す。さらに、坦負乾草の焚火を描く。したがって、他にみる竜女成仏に関する画相はここには示されていないことになる。

第五変相も右半分に雲上の塔内二仏並坐像が示され、それに向って飛

来する菩薩群像と僧俗。その左方画面を逆勝手に斜めに区切った地上には上方に仏殿造営の光景、下方に転輪聖王の邸宅が示されている。他本にみる良医調葉の場面と高床説法はない（挿図28）。

第六変相は主題としては昇天する二俗を除いて宋、元版本と同じであるが、展転説法がここでは僧形のみで、俗形の説法はなく、また意見菩薩の焼臂供養する舍利塔が四基ではなく、三基になっている。しかし、海辺で蓮台に乗って礼拝される人物はここでは明らかに女性であるが、宋本にみた竜形はない。

第七変相は、二仏並坐の七重宝塔を礼拝する妙音菩薩と騎象の普賢菩薩の影向が上方に示され、その左手に観音品の雷雨下に唐傘をさす男、山頂から落下するも虚空に安住する男、虎からのがれる男、盗賊にあり男、火災に会う男、横臥する男、杵械枷鎖難、刀尋段々壊、敵王品の二王子神変の光景が示されている。

以上が羽賀寺本七冊の図相であるが、その内容は、例えば塔が多層になっているなど、元版の影響も窺うことができる。

鍋島本は全巻にわたって宋版と主題、構図配置ともきわめて近い関係にある。しかし、両本を比較すると、第六変相では、意見菩薩が焼臂供養する塔が二基となっており、また露台の入口に囑累品で説く仏が菩薩の頂きを手でなでる光景が加えられている。第七相では左下端に柵の一部が描かれ、また露台入口の前で如来像を礼拝する光景が加えられている。

根津本も、また宋版の図様に近い。少し異なる点を指摘すれば、第一巻変相で、仏画制作の場面に画材を置いた机が描かれ、第二巻変相では露

台のそばに立つ三本の大樹がなく、窮子に財宝を与える長者の前に机があって、その上に財宝が置かれている。また、第六巻変相では蓮台上に坐す俗人のそばに竜が描かれていない。第七巻変相では、飛来する妙音菩薩像が描かれていない。雷雨下の人物は唐傘をさし、杵械枷鎖難は示されないが、その場所すなわち左下端に海難場面が示され、二王子神変の場面に王夫妻を礼拝する王子の姿が描きそえられている。

東北大学本は巻四の一冊であるが、図相の主題は全く宋版と同じである。しかし、多宝仏塔が重層になっている点、宋版とは異なる。

以上が高麗写経にみる法華経見返絵であるが、画面構成の基本は宋版のそれに準拠していることは明らかであろう。しかし、元版にみられる図相の特色、すなわち、巻一には、童子が地面に仏像を描く情景が加わり巻六の蓮台上の人物の傍に竜の姿が無くなっていること、さらに巻七では妙音菩薩の飛来の代りに観音菩薩の姿が示され、海難の光景が加わり、雷雨下の男のさす笠が唐傘となるなどの元版にみられる図相は、いづれも高麗経の見返絵にも共通するところがある。したがって、これらのことを勘案すると、高麗写経にみる法華経見返絵は三鈔繫文で周囲をかこみ、露台上の釈迦説法などの基本形式は宋版に準拠し、各図相の表現における図相は同時代である元代の法華経絵の影響を強く受けていたと考えることができるのである。

## 七

日本における法華経見返絵の初見は、延長三年（九二五）に醍醐天皇が母后の為に書写して供養された法華経、無量義経、観普賢経、阿弥陀

經、般若心經の法華三部經に仁教法師が勘申して描いた經繪で、これは紺紙金字經である。また、天曆八年(九五四)の村上天皇宸筆の金字法華三部經は当時の代表的な絵師飛鳥部常則が見返繪を描いており、以後、十一世紀、十二世紀にかけて多くの作品が作られ、遺品もかなりの数が残されている。

しかし、それらの作品と中国の作品との間では、表現はもとより、画題の選択においてかなりの隔たりがあつて、早急に相互の影響関係をたどることは困難である。そこで、ここでは時代は降るが、宋版の影響を受けて室町時代に刊行された版本法華經の見返繪について、のべたいと思う。

日本における法華版經の開板は平安時代にさかのぼるが、見返しに繪のある出相法華經が日本で刊行されるようになったのは室町時代に入つてからのようで、吉野の竜門文庫蔵の貞治四年(一二三六)刊法華經八冊の卷八の奥書に「是出相之經比方未有開板者也」とあることから、恐らく、この刊本が最初と考えられる。

この版經はいわゆる臨川寺版であるが、これと同図の見返繪をもつ版經が唐招提寺にある。この法華版經は現在卷子装になっており、その卷八の奥書に「願主 僧賢覺」とあることから、賢覺版と呼ばれている。賢覺の伝は不明であるが、卷八の卷末に本文料紙とは別の一紙に墨書で是岑という人が母の三十三回忌の菩提の為に本經六十六部を摺写供養した(12)ことと、応永十九年二月十八日の年紀を記入しており、(12)応永十九年(一四二二)以前の開板であることは間違いない。

唐招提寺本(図版六・挿図29~35)は卷一の見返繪を欠くが、いずれも八

卷本で、中国版經の七卷本とは、卷四以下の各卷の品数が少くなっている。したがって、四卷以下の繪の図相の配置に相違がみられる。しかし、全体的な構図や各主題の図相は、宋版の図相にきわめて近似しており、宋版に基づいて彫成したことは推定できる。なお、日本版の見返繪には宋版にみた卷頭の經題はついてない(13)。

そこで、日本開板の図相を宋版のものと比較して、その異同を明らかにし、さらに日本の版本の図相の特色と、その意味するものについての私考をのべることにする。

まず、最初に七卷本と八卷本の構成上の相違を表記しておく。

妙法華經 七卷本 八卷本

序品第一 卷一 卷一

方便品第二

譬喻品第三 卷二 卷二

信解品第四

藥草喻品第五 卷三 卷三

授記品第六

化城喻品第七

五百弟子受記品第八 卷四 卷四

授学無学人記品第九

法師品第十

見宝塔品第十一

提婆達多品第十二 卷五

勸持品第十三

安樂行品第十四 卷五



從地涌出品第十五

如來壽量品第十六

分別功德品第十七

隨喜功德品第十八

法師功德品第十九

常不輕菩薩品第二十

如來神力品第二十一

囑累品第二十二

藥王菩薩本事品第二十三

妙音菩薩品第二十四

觀世音菩薩普門品第二十五

陀羅尼品第二十六

妙莊嚴王本事品第二十七

普賢菩薩勸發品第二十八

卷六

卷六

卷七

卷七

卷八

各巻の構成が一致している巻一から巻三までの図相は殆んど相違が認められない。しかし、巻一では童子たちの礼拝する塔が臨川寺版では多宝塔と五輪塔で、わが国によくみる塔形に変化している。巻二の火宅の外に描かれた三車は、宋版にない鹿車・羊車の御者が加えられ、火宅の下に示される窮子の小屋が宋版では竹を編んだような丸形の小屋であったのに日本版は、崖下の樹木の間の切妻の屋根の小屋である。また全般に、木立ちや草がそえられて周囲の自然景が加えられている。なお、宋版にみた露台の脇と火宅の外にある大樹は日本版にはないが、童子に追われる狐の前に蛇が加わっている。また、巻三では化城の城壁に財宝が散りばめられていて、これが宝所であることを暗示している。

宋・元版本にみる法華経絵（下）

巻四では、二仏並坐の宝塔が、宋版が六角堂であったのに、日本版では通常の多宝塔形で描かれ、七巻本では五百弟子品の「衣裏繫珠」の右側、海上に涌出した文殊菩薩の位置に、仏前にて礼拝する二僧の立姿が描かれている。これは人記品に説く阿難と羅睺羅の授記を示すものである。また、画面左下端に山頂を掘る二人の人物がいる。これは法師品に説く高原鑿水の譬喩を示すものである。これはいずれも宋版になかった図相である。なお、露台入口のところで宋版でもみた経を読む女性がいるが、これを勸持品所依の図相とすると、八巻本では巻五に示されなければならない。

巻五では、転輪聖王の邸宅の横が海になっていて、そこに提婆品（七巻本では巻四所収）で説く文殊菩薩の海中出現が示され、その下に宋版ではなかった老人と若者の対談が描かれている。これは涌出品に説く「父少而子老」の説相である。また、露台入口正面に竜女の出現と昇天を示し、その背後に宋版にない提婆品所説の阿私仙に奉仕する採薪給水の図がある。なお、画面左下端には、宋版巻五の露台入口にある高床の僧説法図と同図が描かれている。これを分別功德品に説く説法僧贊歎の図相とすれば、巻六に示されなければならない。

巻六、露台の正面、画面左下端に分別功德品所依の建築作業中の人々を描く、これは宋本と全く同図である。寿量品の説相である調薬場面は上方に示し、その左に宋版にはない法師功德品所依の五種法師（経の受持・誦・誦・解説・書写）の五比丘を示す。その手前に隨喜功德品所依の財宝布施と展転説法を描くが、宋版より説法する者が一人増加して、三人が示されている。

卷七は、宋版にみた神力品の釈迦の放光中に示される神殿はない。しかし、これに代って左端や上に全身から光を放つ仏とそれに侍す菩薩を描いている。また妙音菩薩の飛来の姿はない。しかし、不軽品所依の人々を拜んでいる常不軽菩薩の姿が増している。さらに、囑累品に説く釈迦が菩薩の頭を手でなでる仏手摩頂の光景が、左端中央にあり、これらはいずれも宋版ではみなかった図相である。なお、放光仏の上方に雲上の宮殿に向う二人の人物があり、これが法師功德品所依とすれば、巻六の図相ということになる。また葉王品所依の意見菩薩が焼臂供養する四基の舍利塔の周囲に宝珠、珊瑚などの財宝が散りまかれている。しか

し、蓮台上の女性のそばには童形の姿はられない。

卷八、宋版の最終巻にみた妙音品所依の仏の放光中に示された東方諸仏の国土は描かれていない。しかし、観音品に関する図相の中に楊柳の一枝を右手に持った観音菩薩が蓮華座に坐している。そして、雷雨下の人物は唐傘をさし、左下端には難破船が描き加えられて、諸難の図は一図増加している。また、画面上方、普賢菩薩に接して、読経する比丘の前で鬼形の者を鞭打つ羅刹女が描かれている。これも宋版ではみなかった図相で、陀羅尼品の説明である。なお、羅刹女が騎象の普賢菩薩の傍に示されていることは、普賢十羅刹女像の図像と関連する構成である

挿図29 法華経巻二見返絵 奈良 唐招提寺蔵

挿図30 同 巻三見返絵 同上

挿図31 同 巻四見返絵 同上

挿図32 同 巻五見返絵 同上



挿図33 法華経卷六見返絵 奈良 唐招提寺蔵

挿図34 同 卷七見返絵 同上

挿図35 同 卷八見返絵 同上

以上、宋版七卷本法華経と日本の八卷本法華版経の見返絵にみる図相の異同についてのべた。次に、日本の八巻本で新しく示される図相についてのおよぶ。

前記したように、巻一から巻三までの三巻は追加されていない。追加されたものをあげると、巻四は人記品の阿難と羅睺羅の授記と法師品の高原鑿水、巻五は提婆品の阿私仙給仕、涌出品の老少対話、巻六は法師功德品の五種法師、巻七は不軽品の常不軽菩薩の諸人礼拝、神力品の如来放光、囑累品の仏手摩頂、巻八は観音品の楊柳観音と海難、陀羅尼品

宋・元版本にみる法華経絵(下)

の羅刹女の擁護。ということになる。この追加は巻構成の変更によって生じた画面の余裕を補うために行われたものと考えられるが、ただそれだけの理由によるのであろうか。前に述べたように、平安時代以来、法華経見返絵は描かれたが、十二世紀中頃に至るとそこに描かれる図相はほぼ定着した。いずれも釈迦説法図を正面から示し、その手前と一部背後に説相を配置する。次にその画題をあげる。<sup>(14)</sup>

巻一 仏塔礼拝(序品)、童子造塔(方便品)  
 巻二 火宅三車(譬喻品)  
 巻三 雷雨下の耕作(葉草喻品)、大布施膳(授記品)  
 巻四 高原鑿水(法師品)、多宝塔出現(宝塔品)  
 巻五 竜女出現、阿私仙給仕(提婆品)、菩薩涌出(涌出品)  
 巻六 病人調薬(寿量品)、転展説法(随喜功德品)  
 巻七 常不軽受難(常不軽品)、仏手摩頂(囑累品)、仏前の蓮華(妙音品)  
 巻八 海難、山頂落下(普門品)、二童子神変(嚴王品)

この定着した図相と前記日本で補充された版本図相を対比すると、高原鑿水、阿私仙給仕、仏手摩頂、海難など、日本の法華経絵では不可欠であった図相が増補されていることが判明する。また、普門品の図中に楊柳観音像が描き加えられていることも、禅宗におけるこの画像の流行とも関係するものである。

和刻本の彫板については、残念ながら宋版に比べて刻線も太くまた粗野で稚拙さが指摘される。しかし、これの版画史上の位置づけについては別の機会にゆずり、ここでは図相の問題で終始することにした。

以上、宋、元版本と和刻本の図相の比較を行った。それを整理すると別表のようになる。この表をみるかぎり、和刻本は元版の影響は殆んど受けず宋版に準拠するところが多いことが判明するであろう。この点、高麗写経の見返絵の図相が元版の影響を強く受けているのと対照的である。さらに、和刻本において追加された図相は、法華経絵として古来わが国で親しまれてきた主題である。したがって、単なる宋版の模倣でなく、日本の法華経絵としての独自性が認められるわけで、永年にわたるわが国法華経絵の伝統がこの版本法華経見返絵に結集しているといっても過言ではないであろう。

(11) 奥書は次の通りである。

是出相之経此方未有開板者也誦習之便莫過於是今寓臨川東岡果侍者以故  
膳写募刊功已畢矣所獲功德奉為前住  
上州路大福禪寺雪嶺存和尚增崇品位  
專禱募者施者隨喜而贊成者聞者見者  
誦誦而受持者何待繫珠早顯理性之常  
在不勞鑿井能明示悟之多方所謂現瑞  
放光永祝

一人之教等出定揚德齊資三有之善根者

貞治乙巳五月一日玉泉周皓謹記

(12) 伏値 先妣正衍禪尼三十三回之辰自身

奉印摺 此妙典六十六部而報母深恩  
以伸供養 伏願生々得如來之授記世々

預諸仏之讚揚普与一切衆生同円  
法華種智者也

應永壬辰之歲梅月十八日 是寧敬諭

(13) 日本で印行された法華経八巻の見返絵寸法を次にあげる。いずれも板匡の高さと巾で単位は糎。

寺本	提持	招提	唐本	庫本	文庫	龍門
( )	( )	( )	( )	16.9	17.4	17.6
17.3	17.5	17.5	17.6	17.6	17.7	17.7
17.3	17.5	17.6	17.3	17.3	17.2	17.7
17.6	17.3	17.5	17.2	17.2	17.2	17.7
17.3	17.5	17.5	17.7	17.7	17.7	17.7
( )	( )	( )	( )	42.5	42.5	42.5
42.6	42.5	42.5	42.5	43.1	43.1	43.1
42.5	42.5	42.5	42.5	34.4	34.4	34.4
43.0	43.0	43.0	43.0	43.0	43.0	43.0
43.0	43.0	43.0	43.0	33.9	33.9	33.9
43.0	43.0	43.0	43.0	42.3	42.3	42.3
42.8	42.8	42.8	42.8	42.3	42.3	42.3

高一二三四五六七八  
卷卷卷卷卷卷卷卷  
卷卷卷卷卷卷卷卷  
卷卷卷卷卷卷卷卷

(14) 追記) わが国における法華経見返絵の主題については拙稿「法華経の絵と今様の歌」(仏教芸術一三二号 昭和五年九月)に述べるところであり、参照されたい。

本稿を書くにあたり、台北国立故宫博物院の蘇篤仁氏、唐招提寺の森本孝順氏、龍門文庫の川瀬一馬氏、文化庁の鷲塚泰光氏、徳川黎明会の山本泰一氏ほか、多くの方々にお世話になった。深く謝意をのべる次第である。



卷五 涌出八菩薩に説法

安樂行品

轉輪聖王の邸宅

從地涌出品

十菩薩飛來

寿量品

妙藥調合

分別功德品

精舎建立

説経僧礼賛

卷六 一菩薩・五比丘に説法

隨喜功德品

僧・俗の高床説法

長者の布施

法師功德品

昇天する二俗

常不輕品

常不輕菩薩の受難

神力品

如来放光中の神殿

囑累品

葉王品

如来前の焼身

四塔前の供養

蓮台上的女性礼拝

とくろまく竜

卷七 一菩薩と二天九俗に説法

妙音品

如来東方世界を放光中に示す

妙音菩薩の飛來

三菩薩に説法

○

○五菩薩飛來

○

○

三菩薩に説法

○

○

○

○

○

○二塔となる

○蓮台上的男性礼拝

二獅子、王夫妻に説法

○

×

○

△父子而子老の対談

○五菩薩飛來

○

○

○

○△僧説法一人増加

○△五種法師

○

○△諸人を礼拝する

△△全身放光の如来

○

○

○

×

×

妙音菩薩の舎利塔礼拝

普門品

雷電下笠をかゝけて逃る男

山頂落下虚空安在

火坑落下

食中毒(家屋内)

虎蛇の難

山賊の難

柵柵枷鎖解放

陀羅尼品

蔽王品

二王子父母前で神変

勸発品

騎象普賢影向

○舎利塔は多層塔となる

○唐傘をさして逃る

○△観音影向

○野外食中毒

○虎難

○△海竜海難

×△刀尋段々壊

○△海難

△説経僧を羅刹女守護

○

○普賢は象の脇に立つ

○

卷八

○唐傘をさして逃げる

○△楊柳観音図

○

○

○

○

○

美術研究所報

研究会 昭和五十七年

六月九日 莊嚴經二例

七月二十一日 国沢新九郎と岩橋教章のりあき

九月二十二日 伝又兵衛筆豊国祭礼図・粉本について

十月二十日 金刀比羅宮所蔵伝為恭旧蔵模本類調査報告

十二月十五日 三十六歌仙絵巻

清原玉筆工芸画

昭和五十八年

三月二十五日 藤森静雄について

江上 綏  
三輪 英夫  
鈴木 廣之  
米倉 迪夫  
真保 亨  
関 千代  
石田 泰弘